

自閉スペクトラム症者における“かわいい”の機能に関する研究

大野, 愛哉

<https://hdl.handle.net/2324/5068156>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (心理学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏 名 : 大野 愛哉

論 文 名 : 自閉スペクトラム症者における“かわいい”の機能に関する研究

区 分 : 甲

博 士 論 文 の 要 約

本論文は、自閉スペクトラム症 (Autism Spectrum Disorder, 以下 ASD) 者の“かわいい”の機能について、認知課題遂行およびコミュニケーションに着目し検討を行い、ASD 者への臨床的・教育的支援への示唆を得ることを目的とした。第Ⅰ部「本研究における問題の所在と目的」、第Ⅱ部「ASD 者における“かわいい”の機能に関する研究」、第Ⅲ部「総合考察」の3部11章で構成され、第Ⅱ部では5つの研究を行った。

第Ⅰ部 本研究における問題の所在と目的 (第1~4章)

第Ⅰ部 (第1~4章) では、先行研究を概観し、本研究における着眼点を整理した。第1章および第2章では、“かわいい”について ASD を対象とした先行研究で検討が行われていないことを受け、定型発達 (Typical Development, 以下 TD) 者における“かわいい”の先行研究を「対象の属性」「認知」「感情」の3要素、およびそれから引き起こされる「行動」「機能」の5つに分類して概観した。その結果、“かわいい”は、幼いもののみならず様々な対象に対して用いられ (「対象の属性」)、報酬や情動、注意に関する脳領域を活性化させる (「認知」)、「対象と一緒に存在したいという願望を伴うポジティブ感情」 (感情) であり、視線を集め保護養育行動を引き出し (「行動」)、認知課題のパフォーマンスやコミュニケーションを促進させる (「機能」) ことが示唆された。

しかしながら、これらの知見を ASD 者に応用させるには、ASD 者の言葉の定義や感情へのラベリングの独特さなどの特性を考慮する必要がある。そのため、ASD 者の“かわいい”について検討を行うにあたり、まず初めに ASD 者における“かわいい”の定義を明らかにする必要があると考えられた (第5章へ)。また、上記のような認知課題パフォーマンスの向上やコミュニケーションの促進といった機能をもたらす背景として、いずれも視線の増加がキーワードとなっていることが考えられた。そのため、“かわいい”の機能について論じる際には、視覚的注意や視線に着目することが有効であると考えられた。

以上を受け、第3章では ASD 者の視覚的注意の特性について、TD 者の“かわいい”機能として示唆された認知課題遂行およびコミュニケーションに着目し概観した。認知課題遂行における ASD 者の視覚的注意については、ASD 者は注意の切り替えや全体統合が苦手である一方で、自身の興味関心があるものには注意を向けやすいことが示唆された。しかしながら、注意の切り替えや興味関心の限局性といった ASD 特性の高低が課題遂行に与える影響について着目した研究は少なく、ASD 者の認知課題遂行を検討するにあたっては、上記のような ASD 特性の影響についても検討することが必要であると考えられた (第6~7章へ)。また、コミュニケーションに関する ASD 者の視覚的注意の特性については、ASD 者は人や人の顔といった社会的な情報に着目しにくく、顔の中でも目に着目することが少ないことが指摘されていた。ASD 者の顔や目への注視の少なさは ASD 者の

言語能力や運動能力といった内的な要因について多数の研究により検討されている一方で、外的な刺激や要因についてはほとんど検討されていなかった。そのため、ASD 者のコミュニケーションに関する視覚的注意を検討する際には、顔や目への注視を促す外的な要因（刺激の視覚的要因など）についての検討が必要であると考えられた（第 8～9 章へ）。

以上より第 4 章では、本研究の目的および第 II 部の構成について整理した。第二部（第 5～9 章）では、ASD 者の“かわいい”の定義および機能について、5 つの検討を行った。まず、第 5 章では、ASD 者における“かわいい”の概念的な整理を行うことにより、ASD 者における“かわいい”の定義および機能を明らかにし、ASD 者支援への“かわいい”適用の前提となる知見を得ることを目的とした。その上で、第 6～7 章では認知課題遂行に着目し、ASD 者の“かわいい”の機能について検討した。第 6 章では、ASD 者の“かわいい”が認知課題パフォーマンスに関する視覚的注意に与える影響について、特性把握のための検討を行い、第 7 章では個別事例での検討により、より日常に即した機能を明らかにすることを目的とした。第 8～9 章では、コミュニケーションに着目した ASD 者の“かわいい”の機能についての検討を行った。第 6～7 章と同様に、第 8 章では、ASD 者の“かわいい”がコミュニケーション上重要な顔に対する視線に与える影響について特性把握のための検討を行い、第 9 章では個別事例での検討により、より日常に即したコミュニケーション上の機能を明らかにすることを目的とした。

第 II 部 ASD 者における“かわいい”の機能に関する研究（第 5～9 章）

第 5 章 ASD 者における“かわいい”の定義・機能

第 5 章では、ASD 者における“かわいい”の定義を明らかにすることを目的とし、13～23 歳の ASD 者 15 名 ($M=17.3$, $SD=3.58$), 14～23 歳の TD 者 30 名 ($M=18.1$, $SD=3.21$) を対象に、“かわいい”について「対象の属性」「感情」「認知」「行動」「機能」の面からインタビュー調査を行い、KJ 法（川喜田, 1967）を用いた分析を行った。さらに、ASD 群、TD 群での各カテゴリの言及率の差について検討した。

その結果、本研究における ASD 者の“かわいい”は、「近づきたい、そばに置いておきたい、よく見たいといった接近動機や、落ち着く、好きといった感情を伴うポジティブ感情」と定義された。さらに、“かわいい”から引き起こされる行動や機能については ASD 者と TD 者で共通して、「見る・触る・聞く・身に着ける等によって引き起こされ、注視や接近といった行動を引き出し、情動調整や動機付けといった機能を持つ」であった。これに加えて ASD 者のみで、精神的健康度の向上やコミュニケーションの促進が得られたため、ASD 者の“かわいい”から引き起こされる行動・機能は「見る・触る・聞く・身に着ける等によって引き起こされ、注視や接近といった行動を引き出し、情動調整や動機付け、精神的健康度の向上やコミュニケーションの促進機能を持つ」ことであった。

その結果、ASD 者の“かわいい”とは、「見る・触る・聞く・身に着ける等によって引き起こされる、近づきたい・そばにおいておきたい、よく見たいといった接近動機や、落ち着く、好きといった感情を伴うポジティブ感情であり、情動調整や動機付け、精神的健康度の向上やコミュニケーションの促進機能を持つ」と定義された。TD 者においては上記以外にも非攻撃性および幸福感についての言及が見られたため、「害がなく、幸福を感じさせ」が追加された定義となった。TD 者では“かわいい”感情の中でも「接近動機」が認知課題パフォーマンスの向上に影響を与えることが示唆されているため、本定義より“かわいい”は ASD 者においても TD 者と同様、認知課題のパフォーマンスを向上させる可能性が考えられた。また、機能について ASD 者のみで見られたものは①「コミュニケーションの促進」および②「精神的健康度の向上」であり、コミュニケーションに

困難のある ASD 者において、①の機能が得られたことは着目すべき点であると考えられた。以上より、次章以降では認知課題およびコミュニケーションに着目し検討を行った。

第 6 章 “かわいい” が認知課題における 視覚的注意に与える影響

第 6 章では、“かわいい” が ASD 者の認知課題パフォーマンスに与える影響について明らかにすることを目的とし、16～25 歳の ASD 者 15 名 ($M=20.40$, $SD=3.32$), 18～24 歳の TD 者 40 名 ($M=21.2$, $SD=1.31$) を対象とし、かわいい刺激呈示前後および統制刺激呈示前後の視覚探索課題のパフォーマンスを測定した。その際、第 3 章より、ASD 者の認知課題遂行を検討するにあたっては ASD 特性の影響についても検討する必要があると考えられたため、自閉症スペクトラム指数 (AQ) を用いて対象者の ASD 特性を測定した。

その結果、興味関心の限局性といった ASD 特性 (AQ 下位尺度「細部への関心」) が高い ASD 者は“かわいい” 刺激を見た後に視覚探索課題のパフォーマンスが向上することが示された。これより、興味・関心の限局性や注意の限局性、常同性へのこだわりが高い ASD 者においては、“かわいい” が注意や集中力、課題へのモチベーションを引き出し、認知課題遂行を円滑にすることが示唆された。この結果から、ASD 者において、“かわいい” を用いることが有効な支援となるかについては、特性の強さが影響すると考えられた。よって第 7 章ではどのような特性に対して“かわいい” が有効であるのか、“かわいい” によってどのような機能が引き出された結果、パフォーマンスが向上したのかについて詳細に明らかにするため、個別事例による検討を行うこととした。

第 7 章 個別事例からみた“かわいい” が ASD 者の認知課題遂行に与える影響

第 7 章では、“かわいい” ものを日常的に使用している対象者に対し、継続的な調査面接および日誌法による調査を行い、“かわいい” が認知課題遂行に与える影響について、日常生活での学習や課題遂行の観点から詳細に検討を行うことを目的とした。“かわいい” ものを日常的に使用している 20 代の ASD 者 1 名を対象に、日誌法および、週 1 回の継続的な調査面接を 5 ヶ月間行った。日誌の記入は 3 ヶ月で、全 62 日分、調査面接は全 14 回であった。

その結果、①“かわいい” は、接触によって気持ちをポジティブにし、その結果行動始発の制御および過集中の抑制を引き起こすこと、②興味関心と深く関連する“かわいい” は他者に受け入れられることで自己受容を促すことが示された。①により、ASD 者でしばしば指摘される「課題に取り掛かるまでに時間や労力を有する」や「過集中により疲れてしまう」といった特性に対し“かわいい” が使用できる可能性が示された。また、②からは「“かわいい” を好きな自分」「“かわいい” に没頭する自分」を他者に受け入れられたことにより、ASD 者自身がそのような自分を受容し、自分らしさを認知し、自己受容に繋がったと考えられた。第 6～7 章の結果より、“かわいい” の導入で気分が上がることによって学習に取り組みやすくなるといったような、教育現場における ASD 者の学習支援に“かわいい” を導入することの有用性が示唆された。

第 8 章 ASD 者における“かわいい” が コミュニケーション上重要な 顔への視線に与える影響

第 8 章では、“かわいい” が ASD 者のコミュニケーションに与える影響を明らかにすることを目的に、“かわいい” がコミュニケーション上重要な、顔に対する視線に与える影響について検討した。4～45 歳の ASD 者 22 名 ($M=19.91$, $SD=9.79$), 3～48 歳の TD 者 25 名 ($M=20.44$, $SD=9.77$) を対象に、赤ちゃん、子犬、子猫のベビースキーマ度を 3 段階で操作した画像を作成して刺激として呈示し、アイトラッカーによる視線計測を行った。刺激呈示後には、各刺激に対するかわいさ評定を求めた。

その結果、ASD 者は自身がかわいいと評定した刺激においては TD 者と同様に目の付近に多くの視線を向けるということが示唆された。従来、ASD 者は顔刺激の目を見ないということが指摘されてきた (e.g., Klin et al., 2002) にもかかわらず、このような結果がもたらされた要因として、ASD

者においても“かわいい”は接近動機や注視を引き出す刺激である（第5章）ということが考えられた。また、この結果から、アイコンタクトなど相手の目を見ることに困難さがあるASD者にとって、“かわいい”ものは目を見やすい、コミュニケーションをとりやすい刺激である可能性が示された。よって第9章では、個別事例検討により、ASD者と“かわいい”の間でどのようなコミュニケーションが行われるのか、それがいかにして他者とのコミュニケーションにつながるかについて検討することとした。

第9章 個別事例からみた“かわいい”がASD者の対人コミュニケーションに与える影響

第9章では、“かわいい”ものを日常的に使用している対象者に対し、継続的な調査面接および日誌法による調査を行い、“かわいい”が対人コミュニケーションにおいて担う役割について個別事例からの検討を行うことを目的とした。“かわいい”ものを日常的に使用している20代のASD者1名（第7章の対象者とは異なる）を対象に、日誌法および、週に1回の継続的な調査面接を6ヶ月間行った。日誌の記入は3ヶ月で全25日分、調査面接は全21回であった。

その結果、“かわいい”は他者とのコミュニケーションをより円滑にするのみならず、“かわいい”ものにネガティブな気持ちを付与するといった自己の外在化を行うことにより、他者との対人関係における洞察の深まりや、コミュニケーションスキルの向上に繋がること示された。このことから、“かわいい”ものに自分の一部を外在化させることにより、問題を客観視し、自身の内的理解を深めることに繋がる可能性が示された。第8～9章の結果より、従来TD者で報告されていた「“かわいい”ものを話題とした発話量の増加」といった機能とは異なる、“かわいい”対象物の目を見てコミュニケーションを取り、自分の気持ちや考えを代弁させること等により他者とのコミュニケーションをはかるといったASD者独自のコミュニケーション促進機能があることが示唆された。これより、“かわいい”ものを媒介として会話をしASD者のコミュニケーションスキルの向上や内的理解につなげるといった、コミュニケーション支援における“かわいい”の有効性が示唆されたと言える。

第Ⅲ部 総合考察

第Ⅲ部（第10～第11章）では各章の研究について概要をまとめ、本研究の成果について総合的な考察を行い、本研究の限界や課題についても明らかにした。本研究で得られたASD者の“かわいい”の2つの機能に共通する要因として、“かわいい”がASD者の限局された興味関心の一部であり、その質および量において限局的であることが考えられた。元来、ASD者の興味関心の限局性といった障害特性は日常生活に支障をきたすものとされてきたが、この興味関心の限局性に“かわいい”という言葉が用いられた場合には、本研究で得られたような認知課題遂行やコミュニケーション促進の機能をもたらす可能性が考えられた。

また、ASD者における“かわいい”機能は、ASD者と“かわいい”の心理的距離や“かわいい”対象の属性に影響を受けることが考えられた。認知課題遂行の機能に関しては、“かわいい”対象が無生物的であることが多く、ASD者はそれを身に着けたりすることにより、自分が“かわいい”になるという“かわいい”との同一化を行っており、“かわいい”と自己の閉じられた関係性を構築していた。これにより自己に対する深い洞察や受容が促され、気分の向上や行動始発の制御、過集中の抑制といった認知課題遂行に関する機能のみならず、自己受容といった機能が得られたと推察された。また、コミュニケーションに関しては、“かわいい”対象が生物的であることが多く、ASD者はそれを対象化・人格化した上で、自己を切り離して付与することにより外在化させ、それを媒介として他者とのコミュニケーションにつなげていくといった、他者に開かれた“かわいい”との関係性を構築していた。このことから、自己の一部を外在化させることにより、自己を客観視し、コ

コミュニケーションスキルの獲得や対人関係に対する洞察を得ることができたため、他者とのコミュニケーションを促進することに繋がっていたのではないかと推察された。

本研究の限界点として、先行知見がない中での仮説生成的な検討であったため、比較検討ができなかったことが挙げられる。そのため今後は、“かわいい”の対照語（e.g., “きれい”, “かっこいい”）との比較検討や、生理的・神経学的指標を用いた検討を行うことにより、ASD者の“かわいい”のみで見られる機能について明らかにすることが課題である。本研究の成果および独自性については、①ASD者への支援について検討するにあたり、先行研究において皆無に等しい研究領域である“かわいい”に着目し、ASD者独自の機能について示した点、②“かわいい”というキーワードを用いて、興味関心といったASD特性を「強み」として生かせることを示した点、③ASD者の内的世界の理解につながる知見を示した点が挙げられる。本研究の成果は今後、学習支援場面、コミュニケーション支援場面において、学習教材に“かわいい”を取り入れる、現在確立されている体系化されたコミュニケーション支援（SST等）を進める主体に“かわいい”対象を取り入れるといった新たなASD者支援プログラムの開発に繋がっていくと考えられる。これにより、従来指摘されていた学習支援におけるASD者の注意・集中の維持の困難さのみならず、コミュニケーション支援における支援や介入へのモチベーションの維持の困難さが解消され、ASD者に対する臨床的・教育的支援の更なる充実に繋がると考えられる。